

談風月楼会卷子

明治六年（一八七三） 本紙 二二・六×四三〇・七cm 紙本墨画 個人蔵

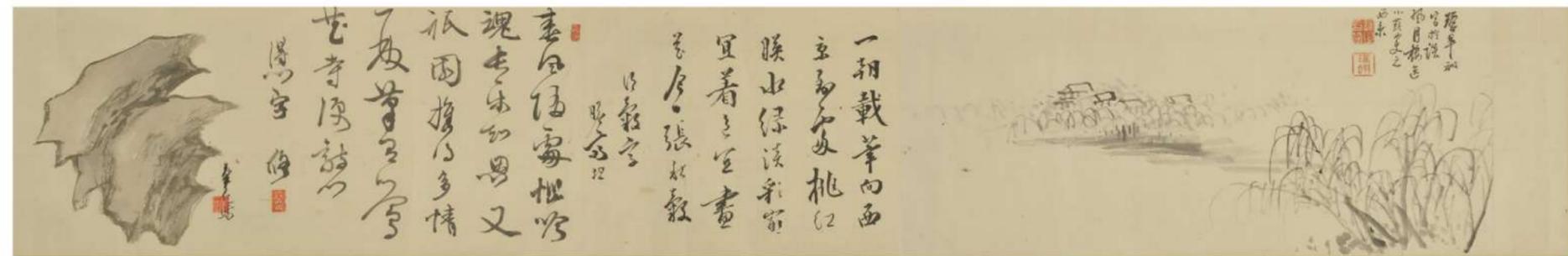
巖谷一六、谷口藹山、渡辺華石、小野湖山、松岡環翠、  
莊田胆齋、三島中洲、木下梅里、股野藍田



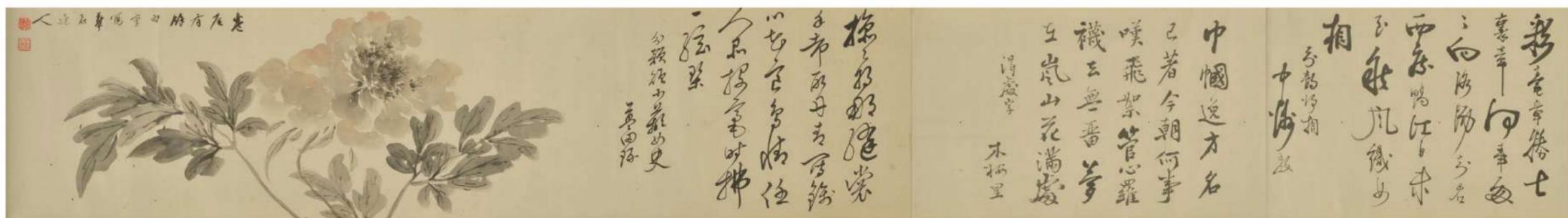
明治六年三月念一書于  
談風月楼送  
小蕨女史之  
西京  
一六居士修



五十三程載  
夢仙の佳人  
枕上夢  
長久高口生



一和載筆向西  
暎山綠淡彩家  
宜著之宜畫  
長・張叔毅  
日新堂  
春風隨處惱吟  
魂長乘双林又  
一枝筆有鶯  
花寺便龍門  
得字 修



彩毫筆第七  
喜幸一何事  
向海協分名  
中野鳴江未  
相  
手勢巧相  
中海  
中園逸方名  
已著今朝何事  
嘆飛絮管心羅  
襪云無番夢  
在嵐山花滿處  
得巖筆  
木梅里



桃花潭水



- ① 巖谷一六
- ② 谷口藹山
- ③ 渡辺華石
- ④ 小野湖山
- ⑤ 松岡環翠
- ⑥ 莊田胆齋
- ⑦ 三島中洲
- ⑧ 木下梅里
- ⑨ 股野藍田



「品山樓」  
3.2×1.5cm



「修字誠卿」  
3.3×3.3cm



「噴霞」  
1.4×0.6cm



「修印」  
1.9×1.2cm

【釈文】 桃花潭水

明治六年三月念一書于  
談風月楼送  
小蕨女史之  
西京  
一六居士修

【釈文】 春風隨處惱吟

魂長乘双林又  
一枝筆有鶯  
花寺便龍門  
得字 修

『巖谷一六日記』によれば、明治六年三月二十一日、浅草寛永寺近くの談風月楼にて、文人たちの集會が行われた。その席で、京都に向かう野口小蕨への送別として、巖谷一六はじめ、十八名が集まり、席上にて作品を描いている。それぞれに韻を与えられ、巖谷一六は「門」字を得て、七言の漢詩を詠んだ。

この作品は、「日記」の内容に合致する作品で、十八名のうち九名の文人たちによる書画が収められている。末尾の渡辺華石の描く牡丹の賛に「巻尾に余白有り。重ねて写す。」とあるので、当初より卷子装であった。おそらくはもう一巻あるものと考えられる。

冒頭の「桃花潭水」とは、李白が友人の汪倫と別れる際に詠んだ「桃花潭の水、深さ千尺」に因んだもので、小蕨との別れを惜しむ両者の親しい関係を示した言葉である。